

## 創世記・出エジプト記 通読

3月



(3月30日)「創世記23:17~20」

その畑とそこの洞穴は、こうして、ヘトの人々からアブラハムが買い取り、  
墓地として所有することになった。(創世記23章20節)

- ・こうしてアブラハムは、マクペラの洞窟を含む畑を手に入れることができました。土地を持つことはこの時代大変重要なことでしたので、多少(かなり)高額でしたが、よかったのかもしれない。
- ・そしてアブラハムは、妻のサラを埋葬します。埋葬といっても土の中に埋めるのではなく、洞窟の中に安置するというイメージでしょうか。イエス様の復活の場面をイメージすればよいと思います。
- ・ここでアブラハムとサラが主人公の物語は、一旦終わります。次の章からは、イサクの物語です。計算ではイサクは37歳になっていますが、まだ独身です。そのイサクに妻を迎えるという物語です。お楽しみに。

(3月31日)「創世記24:1~9」

僕は尋ねた。「もしかすると、その娘がわたしに従ってこの土地へ来たくないと  
言うかもしれません。その場合には、御息をあなたの故郷にお連れして  
よいでしょうか。」(創世記24章5節)

- ・アブラハムは妻を亡くし、年を重ねていきます。息子のイサクもサラが亡くなったときにはすでに37歳でしたが、まだ妻がいませんでした。当時にしては、遅かったのだと思います。
- ・アブラハムはイサクのために妻を迎えるように、僕(しもべ)に命じます。ただしそこに3つの条件を出します。彼らが住んでいる地であるカナンからは迎えないこと。生まれ故郷である親族の地から迎え入れて欲しいということ。
- ・そしてその親族の地には、息子イサクは連れて行くなということです。三番目の条件が厳しいように感じます。しかし子孫にカナンの地を与えられた以上、ここから出て行かせる必要はないとアブラハムは考えたのでしょう。神さまが与えてくださると信じるのです。

(3月1日)「創世記16:7~12」

主の御使いはまた言った。「今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。その子をイシュマエルと名付けなさい 主があなたの悩みをお聞きになられたから。」(創世記16章11節)

- ・サライがつらく当たるため、ハガルは我慢できずに、サライの前から逃げ出してしまいます。アブラムもハガルではなくサライの味方になったため、とても辛かったのではないかと思います。
- ・そのハガルの元に、主のみ使いがやって来ます。イエス様の降誕物語の中のマリアへの受胎告知のように、「やがてあなたは男の子を産む」と告げ、その子の名前を「イシュマエル」にするように伝えます。
- ・「イシュマエル」とは、「主は聞き入れる」という意味です。ハガルの苦しみ、神さまに聞かれたのです。ただし彼は「兄弟すべてに敵対して暮らす」と預言されます。そのせいか、ユダヤ教ではイシュマエルのことを、よこしまな人物と見ていたようです。

(3月 2日)「創世記 16 : 13~16」

ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそエル・ロイ (わたしを顧みられる神) です」と言った。それは、彼女が、「神がわたしを顧みられた後もなお、わたしはここで見続けていたではないか」と言ったからである。(創世記 16 章 13 節)

・この「日ごとの聖句」では、新共同訳聖書を用いています。新共同訳聖書では、「エル・ロイ」という言葉のあとに、「わたしを顧みられる神」との説明が書かれています。ただしこの説明は聖書原文にはなく、翻訳時に付け加えられたものです。

・そのせいか、新しい聖書にはこの説明がなくなりました。ただ個人的には、説明があった方が聖書を読みやすいように思います。

・イスラム教では、イシュマエルとハガルには神さまの特別な加護があったことから、二人は神聖視されています。彼を特別な預言者や犠牲の子とする見方は、ユダヤ教が彼をよこしまな人物とするそれとは、大きく違ってきます。

(3月 3日)「創世記 17 : 1~8」

あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。(創世記 17 章 5 節)

・アブラムが 99 歳のとき、神さまは彼を「アブラハム」と改名します。彼が決めたのではなく、神さまが決められたということに、大きな意味があります。

・「アブラム」は、「父は高い」という意味でした。それが「アブラハム」になると、「多くの国民の父」という意味に変わります。「わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする」という神さまの約束通りの名前です。

・イシュマエルはアブラハムが 86 歳のときの子どもでした。ですからすでに 13 歳になっています。神さまはその子を用いて、アブラハムとの契約を守るのでしょうか。そして 99 歳のアブラハムには、神さまのこの約束はどのように聞こえたのでしょうか。

(3月 28日)「創世記 23 : 3~9」

「わたしは、あなたがたのところに一時滞在する寄留者ですが、あなたがたが所有する墓地を譲ってくださいませんか。亡くなった妻を葬ってやりたいのです。」(創世記 23 章 4 節)

・アブラハムはヘブロン地では寄留者でした。そのためサラを埋葬するには、自分たちの土地に戻るか、新しい土地を得るか、という選択が考えられました。アブラハムは新しい土地を手に入れることにしました。

・そこには、神さまの「あなたの子孫を空の星のように、海辺の砂のように増やす」という約束も頭にあったことでしょう。これから先、生まれてくる子どもたちのためにも墓地(土地)を確保しておく。そのことはとても大事なことでした。

・アブラハムの頭には、すでに目ぼしい場所があったようです。エフロンが所有するマクペラの洞窟です。その場所を十分な代価で譲ってくれるようにと、アブラハムは提案します。

(3月 29日)「創世記 23 : 10~16」

アブラハムはこのエフロンの言葉を聞き入れ、エフロンがヘトの人々が聞いているところで言った値段、銀四百シェケルを商人の通用銀の重さで量り、エフロンに渡した。(創世記 23 章 16 節)

・墓地を購入する交渉は、町の門でおこなわれました。人々が多く行き交う町の門は、当時の社交場でした。大事な交渉事も、この場所でなされました。ルツ記の中にも、そのような場面が登場します。

・エフロンは当初、畑地も洞窟も差し上げますと申し出ます。とても謙虚で、ありがたい言葉です。しかしアブラハムはその提案をやんわりと断り、きちんと代金を支払いますと返します。

・その言葉を聞いてエフロンは、銀 400 シェケルを提示します。約 4.5 kg です。実はこの金額は、当時の畑の額としてはものすごく高額でした。アブラハムは断らないだろうと吹っ掛けたのでしょうか。アブラハムは黙って銀を量り、渡します。

(3月 26日)「創世記 22 : 20~24」

これらのことの後で、アブラハムに知らせが届いた。「ミルカもまた、あなたの兄弟ナホルとの間に子供を産みました。

(創世記 22 章 20 節)

- ・突然アブラハムの兄弟ナホルの話題になります。創世記 11 章 26 節にあるように、アブラハムはテラの息子で、ナホル、ハランという二人の弟がいました。ちなみにアブラハムのおじいさんの名前もナホルです。ややこしいです。
- ・ハランの息子は、ソドムから逃げることができたロトです。ここまで、ナホルの子孫に関しては何の記述もありませんでした。
- ・しかしこの箇所に出てくる一人の人物が、24 章以降に重要な役割を持ちます。八番目の子どもベトエルがもうけたリベカです。イサクとベトエルはいとこに当たりますが、イサクはアブラハムが 100 歳のときの子どもですので、リベカの方が、年齢が近いのでしょうか。

(3月 27日)「創世記 23 : 1~2」

サラは、カナン地方のキルヤト・アルバ、すなわちヘブロンで死んだ。アブラハムは、サラのために胸を打ち、嘆き悲しんだ。

(創世記 23 章 2 節)

- ・サラは 127 歳で亡くなりました。イサクを生んだのが 90 歳のときでしたから、それから 37 年生きたことになります。ハガルとイシュマエルの件では少し印象を悪くしましたが、彼女は長年アブラハムと共に歩いていきました。
- ・アブラハム同様、生まれ故郷を離れて過ごすことは、大変だったと思います。また旅の途中でファラオやゲラルの王に召し入れられそうになるなど、思いもしない出来事が多くありました。
- ・サラという名前には、「高貴な女性」という意味があります。またサラの性質を象徴する言葉として豊穡、創造、寛容があげられるそうです。アブラハムが信仰の父であるならば、サラは何と形容すればよいのでしょうか。

(3月 4日)「創世記 17 : 9~14」

あなたたち、およびあなたの後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。

(創世記 17 章 10 節)

- ・割礼という儀式は、エジプトやシリアなどにも広まっていた。ただしそれは「掟」というものではなく、習慣としておこなわれていたようです。男性の生殖器の包皮を切り取ることによって、ばい菌が入り込むことを防ぐ効果もあったようです。
- ・ユダヤ人は、割礼をととても大事にしていきました。割礼を受けることで、救いの中に加えられると信じていたからです。そのためイエス様が天に昇られキリスト教が形づくられていたころ、割礼をどう捉えるべきかという議論が起きました。
- ・パウロは大切なのは割礼ではなく、信仰であることを常に説きました。「無割礼の異邦人」であったとしても、その信仰によって救われるというのです。このことはわたしたちにとっても、素晴らしい福音(グッドニュース)です。

(3月 5日)「創世記 17 : 15~22」

アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。「百歳の男に子供が生まれるだろうか。九十歳のサラに子供が産めるだろうか。」

(創世記 17 章 17 節)

- ・アブラムがアブラハムになったのと同じように、神さまはサライの名前も「サラ」とするように命じられます。「サラ」には、「高貴な女性」という意味がありますが、神さまはどのような意図で彼女の名前をそのように変えたのでしょうか。
- ・アブラハムは、サラに男の子が与えられるという神さまの言葉を聞いて、笑ってしまいます。子どもが生まれるときには少なくとも、アブラハムは 100 歳、サラは 90 歳になってしまうからです。
- ・しかし神さまは、その約束が必ず守られること、また生まれてくる子どもにはイサク(彼は笑う)と名付けるように告げます。そしてイシュマエルには祝福が与えられ、イサクとは契約を立てるとも言われます。祝福と契約、この違いは何なのでしょう。

(3月 6日)「創世記 17:23~27」

**アブラハムの家の男子は、家で生まれた奴隷も外国人から買い取った奴隷も皆、共に割礼を受けた。**  
(創世記 17 章 27 節)

- ・以前ノアの箱舟の物語の中で、神さまは「洪水が地を滅ぼすことはもはやない」という契約を立てられました。それは神さまの一方的な思いであり、そのような契約のことを片務契約と呼びます。
- ・そして今回の神さまとアブラハムとの契約は、双務契約です。双方が約束を守らなければならないという、わたしたちの社会でも一般的な契約の形です。
- ・アブラハムは、自分を含む家の男子すべてに割礼を施すことを命じられました。その中には、奴隷も外国人もいたようです。それが彼らの義務でした。そのアブラハムの行為を受けて、神さまは「あなたの子孫を大いに増やす」という約束を履行されるのです。

(3月 7日)「創世記 18:1~8」

**アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。**  
(創世記 18 章 8 節)

- ・ユダヤの人たちには、旅人はもたさなければならないという強い思いがありました。それは、自分たちが寄留者であった時代にもてなされた経験を忘れないためだとも言われています。
- ・ルカ 11 章 5~6 節には、旅をしていた友達に対してパンを出したいから、真夜中に他の友達のところに借りに行くという内容のたとえが語られます。しかしそれが友達ではなかったとしても、旅人に対して親切にするのは当たり前のことだったようです。
- ・ところがアブラハムは、「旅人をもてなす」以上に 3 人をもてなします。上質の小麦粉でパン菓子を作り、柔らかくておいしそうな子牛を調理します。さらに彼は、給仕までします。アブラハムには、彼ら 3 人の正体がわかっていたのでしょか。

(3月 24日)「創世記 22:9~14」

**御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」**(創世記 22 章 12 節)

- ・アブラハムが息子イサクを縛り、刃物を取って屠ろうとした瞬間、天から主の御使いが「その子に手を下すな」と告げます。神さまはアブラハムがご自分を恐れ、自分の息子イサクをささげることを惜しむかどうかを試したというのです。
- ・「すべての物は神の賜物」、わたしたちは頭ではわかっている、なかなかできないことがよくあります。お金や財産を手放すことができなかったり、名誉や地位にしがみついたり。
- ・すべての物は神さまによって備えられる。そのことを伝えるために、神さまはアブラハムを試みられました。ただ祭壇に縛られ、刃物をふるい落とされそうになったイサクの心情はどうだったのでしょうか。わたしだったらトラウマになります。

(3月 25日)「創世記 22:15~19」

**地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。**  
(創世記 22 章 18 節)

- ・自分の子どもをささげることをいとわなかったのも、あなたを祝福する。神さまのこの考え方は、なかなか理解できるものではありません。「神さまのことを第一に考えよ」ということなのでしょうが、「殺すな」という教えとは相反します。
- ・あなたがわたしの声に聞き従ったから、わたしはあなたを祝福する。それがこの箇所では聖書が伝えたかったことです。アブラハムは信仰の父と呼ばれますが、そのような信仰を持つことは、わたしたちには難しいのかもしれない。
- ・だから、イエス様が必要なのです。自分の子どもどころか、お金も時間も、ちょっとした物さえもなかなか神さまにささげることができないわたしたち。そんな弱いわたしたちを神さまは愛し、救うために、イエス様を遣わされたのです。

(3月 22日)「創世記 21 : 22~34」

アブラハムは答えた。「わたしの手からこの七匹の雌の小羊を受け取って、わたしがこの井戸(ベエル)を掘ったことの証拠としてください。」

(創世記 21 章 30 節)

- ・ユダヤは乾燥した地域であり、水はとても大切でした。井戸を掘り当てることも大事ですし、その井戸の水を維持管理すること、略奪者から守ることもとても重要なことでした。
- ・アブラハムはペリシテ人の地において、寄留者でした。ですから当然、前から住んでいた人たちとの争いもあったことでしょう。しかし順調に財産を増やしていくアブラハムを見て周りの人たちは、その背後に神さまの存在を感じていたようです。
- ・アブラハムは争いを避けるために、契約を結びます。ヘブライ語で「井戸」はベエル、「誓う」と「七匹」はシェバと言います。そのためこの地は「ベエル・シェバ」と呼ばれるようになります。後世の人たちがこの地に来るたびに、アブラハムの契約を思い起こすのです。

(3月 23日)「創世記 22 : 1~8」

アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。(創世記 22 章 8 節)

- ・今日から始まる物語は、とても難しい箇所です。神さまはアブラハムに、息子イサクを「焼き尽くす献げ物」として献げなさいと言われます。21 章 12 節で「あなたの子孫はイサクによって伝えられる」と言われていたにもかかわらずです。
- ・アブラハムは神さまの言葉に対して、何も反論しようとはしません。アブラハムがどのように思い、何を考えていたのか、聖書は何も語りません。彼は朝早く準備をし、イサクと従者を連れてモリヤの地に向かいます。
- ・アブラハムは「小羊はどこですか」と尋ねるイサクに、「きっと神が備えてくださる」と答えます。「その小羊とはお前のことだよ」という言葉を飲み込んだのでしょうか。それともきっと、神さまは助けてくださるに違いないという希望を捨てていなかったのでしょうか。

(3月 8日)「創世記 18 : 9~15」

サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

(創世記 18 章 15 節)

- ・アブラハムにもてなされた 3 人の人は、神さまの使いでした。ただし聖書には明確に、天使やみ使いといった言葉は使われていません。これまで神さまは、アブラハムには直接語り掛けてきました。
- ・3 人のうちの一人が言います。「わたしが来年の今ごろ戻ってきたとき、サラは男の子を生んでいる」。17 章 15~22 節で神さまがアブラハムに告げたことと同じことを、再び告げるのです。
- ・サラはその言葉を天幕の入り口で聞いて、心の中で笑いました。そのことを彼らは責めます。しかしアブラハムも、神さまから直接言われたときに同じように笑っていました。どうしてサラだけが、厳しく非難されるのでしょうか。しかも最後は、主の言葉になっています。

(3月 9日)「創世記 18 : 16~22」

主は言われた。「わたしが行おうとしていることをアブラハムに隠す必要があらうか。」

(創世記 18 章 17 節)

- ・聖書はここから、ソドムとゴモラの物語に入ります。ルカ福音書 10 章 12 節に「言っておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む」というイエス様の言葉がありますが、その地名は神さまの裁きによる滅びの象徴として用いられていました。
- ・この辺りから、その人たち(3人の人)と主(神さま)とが一緒になって、アブラハムと語り合っているようにも思えます。まず神さまが3人の人に「隠す必要があらうか」と相談し、「見て確かめよう」と促します。
- ・そこで3人の人はソドムに向かって行きますが、アブラハムと神さまはその場にとどまっているようです。アブラハムと神さまとの信頼関係が、ここにみられます。

(3月10日)「創世記18:23~33」

アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その十人のためにわたしは滅ぼさない。」(創世記18章32節)

・ソドムを滅ぼすことを決意された神さまに対し、アブラハムは執り成しをします。「正しい人が50人いるかもしれない。その人たちも一緒に滅ぼすのか」というアブラハムの訴えを、神さまは聞き入れます。

・わたしたちの執り成しの祈りも、神さまからみたらアブラハムの執り成しと同じようなものなのかもしれません。神さまと祈りの中で交渉をしていく。言い方はあまりよくありませんが、「しつこく」「執拗に」祈る姿勢も求められているのです。

・アブラハムは50人から45人、40人、30人、20人、10人と、少しずつハードルを下げていきます。しかし結果的にソドムには、正しい人は10人もいなかったようです。5人、3人、1人と交渉を続けていけばよかったのに、と忘れてしまいます。

(3月11日)「創世記19:1~5」

しかし、ロトがぜひにと勧めたので、彼らはロトの所に立ち寄ることにし、彼の家を訪ねた。ロトは、酵母を入れないパンを焼いて食事を供し、彼らをもてなした。(創世記19章3節)

・アブラハムの元に来た人は三人でしたが、そのうち二人がソドムに行きました。彼らは御使いであると、今日の箇所には書かれています。彼らはソドムの町の門に座っていました。正しい者が何人いるのか、数えているのでしょうか。

・ロトは二人を見て、もてなしたいと願います。最初は断っていた御使いたちも、その言葉に促されてロトの家に入ります。そこに町の男たちが押しかけ、「客人を出せ。なぶりものにしてやるから(新しい聖書では『連中を知りたいものだ』)」とわめきたてます。

・「知る」という言葉には、性的な含意があります。そのためこの場面は、男性同性愛のことを指していると解釈されてきました。一方で客人の性別は明らかにされておらず、そこまで限定するのはどうか、という見方もあります。

(3月20日)「創世記21:8~13」

神はアブラハムに言われた。「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい。あなたの子孫はイサクによって伝えられる。」(創世記21章12節)

・イシュマエルは、アブラハムが86歳のときの子どもです。したがって、イシュマエルとイサクは14歳の差があります。中学2年生のときに弟が生まれた、ということです。

・サラはそのイシュマエルがイサクをからかっているのを見て、怒ります。新共同訳聖書の「からかっている」という訳では相手をいじめているような印象を受けますが、新しい聖書では「遊び戯れている」となっています。仲良くしているようにも感じます。

・ただサラにとっては、自分の子どもだけが「本家」だというのでしょうか。多少わがままのようにも思えます。しかし神さまは、サラの言うことを聞くようにとアブラハムに伝えます。なんだかイシュマエルが、不憫でかわいそうです。

(3月21日)「創世記21:14~21」

神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。」(創世記21章17節)

・神さまに「サラの言うことを聞くように」と言われたアブラハムは、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、荒れ野に送り出します。ハガルには行く当てもなかったでしょう。また生きていく術も持たなかったと思います。

・そう考えると、アブラハムのこの行為はとてつもなく冷たく思えます。いくら神さまがその子も一つの国民とすると約束されたとしても、女性と子どもだけを荒れ野に放り出すのは、やりすぎだと感じてしまいます。

・神さまはハガルを守られました。神さまは子どもの泣き声を聞かれ、ハガルの目を開かれ、生きていくための水を得ることができました。二人は、これから先聖書には登場しません。サラはこれでよかったのでしょうか。

(3月18日)「創世記20:17~18」

アブラハムが神に祈ると、神はアビメレクとその妻、および侍女たちをいやされたので、再び子供を産むことができるようになった。

(創世記20章17節)

- ・昨日の箇所、アビメレク王がアブラハムに過剰ともいえる贈り物などをした理由は、「アブラハムに祈って欲しいから」でした。神さまは7節で、「彼は預言者だから、あなたのために祈り、命を救ってくれるだろう」と伝えていました。
- ・神さまはすでに、アビメレクと妻、および侍女たちに災いをもたらせていました。その災いとは、彼女たちの胎をすべて堅く閉ざすということです。それはアビメレク家に、子孫が与えられないということを意味しました。
- ・子が与えられるというのは、神さまの祝福と考えられていました。逆に与えられないのは、神さまによる罰だとされていました。人間の出生はすべて、神さまがコントロールしているという思想が、ここにはあらわされています。

(3月19日)「創世記21:1~7」

サラは言った。「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い(イサク)を共にしてくれるでしょう。」

(創世記21章6節)

- ・三人の人が予告した通り、サラは身ごもり、子どもを産みます。そのときアブラハムは100歳、サラは90歳でした。普通では考えられない出来事が、彼女たちの身に起こったのでした。これは神さまのなさる業だということです。
- ・子どもが生まれると聞いたとき、アブラハムもサラも信じられずに笑いました。サラはそのとき、「あなたは確かに笑った」と神さまに指摘されます。そして今回も、彼女は笑いした。しかし今回は、喜びの笑いでした。
- ・イサクとは、神さまがアブラハムに付けるように命じた名前です。そのイサクという語には、「笑い」という意味がありました。子どもを与えられたことで、サラは本当の「笑い」を得たのです。

(3月12日)「創世記19:6~14」

実は、わたしたちはこの町を滅ぼしに来たのです。大きな叫びが主のもとに届いたので、主は、この町を滅ぼすためにわたしたちを遣わされたのです。

(創世記19章13節)

- ・ロトは客人(二人の御使い)を守ろうとします。中近東では、どんなことがあっても客人を守るという習慣があったようです。しかしロトの自分の娘を差し出すという提案は、読んでいてあまり気分のよいものではありません。
- ・当時、娘の社会的な地位は低かったとはいえ、父親としてこの行為はどうか、というのが正直な気持ちです。ロトは交渉の手段として、娘を差し出すということを口にしたにすぎず、本意ではなかったと解釈する人もいますが、果たしてどうだったのでしょうか。
- ・結局、交渉は決裂しました。御使いはすぐにロトを守ります。そしてロトの娘や婿たちに、すぐにソドムから離れるように声をかけます。しかし婿たちは、そのことを信じることはできませんでした。しかし婿たちが信じていたとしても、「10人」には届きませんでした。

(3月13日)「創世記19:15~29」

彼らがロトたちを町外れへ連れ出したとき、主は言われた。「命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。低地のどこにもとどまるな。山へ逃げなさい。さもないと、滅びることになる。」

(創世記19章17節)

- ・神さまはついに、ソドムとゴモラに罰を下されます。御使いたちはロトに対して、山に逃げるようにと命じます。神さまは「アブラハムのことを忘れず」、ロトを救い出されたのだと聖書には書かれています。
- ・アブラハムが執拗に、「正しい者が何人いれば」と訴えていたので、正しい者であったロトの家族だけは救われたということなのでしょう。ただし一つだけ、条件がありました。
- ・それは、「振り返ってはならない」というものでした。財産や家など、残してきた物に未練を残すなということでしょうか。しかしロトの妻だけは振り返ってしまい、塩の柱になってしまいました。

(3月14日)「創世記19:30~38」

娘たちはその夜、父親にぶどう酒を飲ませ、姉がまず、父親のところへ入って寝た。父親は、娘が寝に来たのも立ち去ったのも気がつかなかった。

(創世記19章33節)

- ・この箇所は、わたしたちにとって理解しがたいものです。いくら子孫を残すことが大切だからといって、父親と関係を結ぶのは良くないのではないか、イスラエルではこんなことが許されるのか、と思うかもしれません。
- ・実際イスラエルでも、近親相姦というのは忌むべきことでした。実は彼らの子孫とされるモアブ人とアンモン人はイスラエル民族と対立を続けていた人たちでした。
- ・そこで、「彼らは忌むべき行為によって誕生した、忌むべき存在なのだ」ということを、聖書を使って語ったのではないかとされます。同じように聖書によって傷つけられた人や民族が、存在するのかもしれない。

(3月15日)「創世記20:1~7」

アブラハムは妻サラのことを、「これはわたしの妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは使いをやってサラを召し入れた。

(創世記20章2節)

- ・確か同じような話があったはずだと思ったあなた、正解です。アブラハム(当時アブラム)は創世記12章10~20節でエジプトに入るとき、妻のサラ(当時サライ)を自分の妹だと言っていました。今回と同じです。
- ・そのときはファラオによって宮廷に召し入れられましたが、今回はゲラルの王アビメレクに召し入れられます。このときサラは90歳近くになっているはずですが、かなり魅力のある女性だったのでしょう。
- ・アビメレク王は夢の中で、「あなたは死ぬことになる」と神さまに告げられます。前出のファラオには、実際に災いが下っていました。偽りを告げて混乱させたのはアブラハムなのですが、彼には何の咎めもないようです。

(3月16日)「創世記20:8~13」

アブラハムは答えた。「この土地には、神を畏れることが全くないので、わたしは妻のゆえに殺されると思ったのです。」

(創世記20章11節)

- ・アビメレク王の心には、怒りよりも神さまへの畏れが生じたようです。アブラハムがこの土地に入る前に感じていた「神を畏れることが全くない」という状況からは、改善したと言えるのかもしれませんが。
- ・アブラハムがサラのことを「妹」だと言う根拠は、聖書の他の箇所には書かれていません。つまりアブラハムの父テラに、娘サラが生まれていたとは書かれていないのです。またもし妹だとしても、異母きょうだいであることは変わらず、ちょっとややこしいです。
- ・この前の箇所の娘を差し出そうとしたロトといい、召し出されることが分かった上で妻のことを妹だと言うアブラハムといい、わたしたちには理解しがたい家族関係が、当時はあったということなのでしょう。

(3月17日)「創世記20:14~16」

また、サラに言った。「わたしは、銀一千シェケルをあなたの兄上に贈りました。それは、あなたとの間のすべての出来事の疑惑を晴らす証拠です。これでああなたの名誉は取り戻されるでしょう。」

(創世記20章16節)

- ・アビメレク王はアブラハムに騙されたと言っても過言ではありません。しかし彼は、神さまの怒りから免れるために、精一杯のことをしました。アブラハムに妻サラを返しただけでなく、羊と牛、奴隷を与え、好きな場所に住んでもよいと伝えます。
- ・さらに銀を1000シェケル渡します。1シェケルは11.4gですので1000シェケルは11.4kgとなります。銀の売買価格は1g約100円ですので、現在の価値で114万円相当です。なかなかの金額です。
- ・ゲラルの王アビメレクがアブラハムとサラの出来事によって、そこまで神さまを畏れるようになったということが、この箇所のメインテーマということなのでしょう。